S.フロイトの自我・本能論
―メタ心理学の展開―

中　野　明　徳*

フロイトは60歳を前にして，それまでの仕事を総決算するように，次々とメタ心理学を構成する理論的論文を書き上げた。メタ心理学は次第に精緻になり，自我について力動論，局所論，経済論，構造論の観点から定義されるようになり，これが現在広く知られているものであり，自我心理学に引き継がれている。また，フロイトは徹底的に人間の心の葛藤の起源を追究した人で，彼の本能論は常に二元論である。ヒステリー研究以来，性の本能を重視し，この本能はエロスとか「生の本能」とも称される。この本能と対立するものが，当初，自我本能とか自己保存本能といわれたが，1920年に「死の本能」に修正された。催眠を放棄した精神分析は，抵抗という現象に直面することになり，抑圧されたものの想起が難しいので，治療が長期にわたるという課題が生じた。そこで，フロイトは想起よりも行動的に反復するという反復強迫に着目し，これは快不快原理からなる快感原則をしのいで，より根源的，一次的，かつ衝動的であるとした。ここから本能の本質を以前のある状態を回復しょうとする衝迫であるとみて，死んで無機物に還ろうとするものを「死の本能」と称した。しかし死の本能の概念が多くの精神分析家の間で受け入れられなかったのは，フロイトが思弁的理論だけ述べて，臨床的応用について語らなかったからであろう。死の本能の概念を臨床に適用した最初の精神分析家がメラニー・クラインである。本能論はそれだけで論じるには限界があり，対象との関係で論じる対象関係論に道を譲ることになった。

〔キーワード〕メタ心理学　生の本能　死の本能　快感原則　反復強迫　自我心理学

Ⅰ．はじめに

ジグムント・フロイトSigmund Freud（1856-1939）は晩年になっても執筆意欲は衰えない。第一次世界大戦（1914-1918）の最中にフロイトは60歳を迎えるが，1915-16年と1916年-17年のそれぞれの冬学期にウィーン大学で精神分析入門の講義を行い，1915年頃からメタ心理学に関する一連の論文に取りかかる。**メタ心理学**とはフロイトが『夢判断』の中で作った無意識心理学の呼称で，意識現象を扱う心理学を超えた心理学の意味である（中野, 2012）。彼は晩年に議論の多い「死の本能」（Todestrieb）を提唱するが，一連のメタ心理学を生んだ背景には何があったのであろうか。

第１の背景として，フロイト（1914b）が『ナルシシズム入門』で示した自我本能と性本能という二分法に無理があったのではないかということである。この論文の執筆理由の一つに，リビドー論は早発性痴呆を説明する際に挫折したというC.G.ユングの批判に答える意味があった。性的リビドーと性的でない自我本能のエネルギーとを区別できるのかという批判に対して，曖昧のままである（中野, 2013a）。フロイトは「思弁的理論を打ち立てるには，まずその根底として明確に定義された概念を獲得しておく必要がある」とし，「経験の解釈のうえに築かれた学問は，曖昧模糊とした基本思想で満足するであろう」と弁明している。

第２の背景としては第一次世界大戦があり，２人の息子マルティンとエルンストが危機に晒された。皮肉なことに，この戦争で，「戦争神経症」は精神分析の歴史にフロイトの無意識理論の当否を検証する前例のない機会を与え，生と死の問題を浮かび上がらせた。彼の息子は復員できたが，1920年娘ゾフィーが２人の幼子を残して死に，フロイトに大きな悲しみを残した。「死の本能」という術語はゾフィーの死の1週間後にフロイトの手紙に登場するという（Gay, 1988）。

第３の背景として，フロイトは1923年以降，口蓋にできた腫瘍や白板症のために33回の手術を受けた。1928年にマリー・ボナパルト王妃の推薦で内科医マックス・シュールがフロイトの主治医になった。シュールは，フロイトが死の欲動を公式化したために，16年にわたる癌の試練に対して強くなっただけではなく，ロゴス（理性）がアナンケ（必然）に直面できるという信念が作られたという（Schur，1972）。

本論はフロイト晩年の極めて難解なメタ心理学に焦点を当てて，現在フロイトの精神分析として広く知られている理論の展開を追っていくものである。この理論的展開で，自我の力動論，局所論，経済論，構造論

＊　福島大学総合教育研究センター・教育相談部門

は完成されていくが，他方，死の本能論は広く受け入れられたわけではなかった。

表１　フロイトの晩年

西暦	歳	出来事
1914	58	「**想起，反復，徹底操作**」「精神分析運動史」「ナルシシズム入門」
1915	59	「精神分析学入門」の講義をウィーン大学で始める，「**本能とその運命**」「**抑圧**」「**無意識について**」
1916	60	「精神分析入門」（-17）
1917	61	「**悲哀とメランコリー**」
1920	64	娘ゾフィーの死，「**快感原則を超えて**」
1921	65	「**集団心理学と自我の分析**」
1923	67	口蓋の癌が見つかり，以後 33 回の手術「**自我とエス**」
1925	69	「自己を語る」
1926	70	「**制止，症状，不安**」「非医師分析の問題」
1930	74	ゲーテ賞受賞，「文明への不満」
1932	76	古沢平作，フロイトのもとへ留学，「続精神分析入門」
1933	77	ヒトラー政権樹立，精神分析関係書は禁書
1936	80	アインシュタインと往復書簡
1937	81	マリー・ボナパルトがフロイトのフリース宛書簡集を入手，「**終わりある分析と終わりなき分析**」
1938	82	ナチスドイツ，ウィーンに侵入し，フロイト，ロンドンに亡命
1939	83	9 月 23 日ロンドンで死去，「モーゼと一神教」，「精神分析学概説」（絶筆）

Ⅱ．メタ心理学諸篇

フロイトは1915年，それまでの仕事を総決算するかのように『メタ心理学諸篇』を構成する12の理論的論文を書き上げたといわれる（Quinodoz，2004）。結果的にはすべてが公表されることはなかったが，メタ心理学は次第に厳密になり，力動論，局所論，経済論の視点から定義されるようになった。

１．想起，反復，徹底操作（1914a）

ブロイアーの浄化療法では，患者を催眠状態に置くことによって，過去を**想起させて**（remembering），**感情を発散させること**（abreacting）が目標であった。しかし自由連想法では何を想起できないかを推定せねばならなくなった。分析医は**解釈**（interpretation）によって，患者の**抵抗**（resistance）を回避しようとした。症状形成の状況にさかのぼり，発病契機の状況に焦点を合わせる操作は以前のまま行われたが，目標は**抑圧抵抗**（resistances due to repression）の克服であった。

フロイトは，被分析者が忘れられたものの，抑圧されたものから何か**想い出す**（remember）わけではなく，むしろそれを**行為にあらわす**（act）ことを見いだした。被分析者は自分が反復していることを知らずに，行動的に**反復**（repeat）している。この**反復強迫**（compulsion to repeat）と転移と抵抗の関係であるが，**転移はそれ自体が反復の一部分であり**，忘れられていた過去を分析医に対してだけでなく，現在の状況における他のすべての領域に対しても転移が起こる。抵抗が大きければ，記憶の想起は難しいが，行為によって反復される。陰性転移となって抑圧する必要が生じたりすると，記憶の想起は行為に席を譲ることになる。

反復するものは，抑圧されているものを源泉とし，実現しえないでいたさまざまな精神的な態度，病的な性格特性などである。実際，分析治療のあいだに症状のすべてを反復する。したがって，「治療期間中の悪化」はしばしば避けられない。このために衝動を実現させてしまったために生じる障害から患者を守るには，治療の継続中は生活上の重要な決定を下さず，治癒の時まで待つという義務を負わせる必要がある。

患者の反復強迫を制御するのは転移の操作である。反復強迫の権利を承認し，患者が分析治療の存在意義を認めるのなら，起源神経症を**転移神経症**（transference-neurosis）に置き換える操作に成功し，癒すことができる。転移は病気と健康な生活とのあいだの**中間領域**（intermediate region）を作り出す。患者に抵抗をさらに熟知させるために，その抵抗を**徹底操作**（work-through）し，患者に時を与えなければならない。フロイトは，抵抗を避けることのできない，しかし促進することもできない経過をその流れに任せておくこと以外に何もしていけないことを原則とした。

２．本能とその運命（1915a）

心理学に欠くことができない概念に本能（独語ではTriebで欲動とも訳される）がある。本能の本質は瞬間的な一衝撃のようには作用しないで，常に恒常的な力のように作用する。本能は外部からではなく，身体内部から襲ってくるので逃げることもできない。したがって本能刺激は**欲求**（need）と呼ぶべきもので，これを解消するものは**満足**（satisfaction）である。高度に発達した精神器官の活動も**快感原則**（pleasure principle）の支配下にある。つまり，快－不快系列の感覚によって自動的に調整され，この感覚が刺激克服の行われ方をあらわしている。フロイトは生物的側面から精神生活をみると，人間の本能は動物と異なって，「**精神的なものと身体的なものとの間の境界概念である**」とみる。

フロイトは本能の概念と関連する術語を検討している。ある衝動の**衝迫**（pressure）は本能の本質であり，

運動的要素，力の総和，活動欲求尺度を意味する。**すべての本能は能動的なものであり**，もし受動的な本能について語れられる場合は，受動的な目標を持った本能を意味しているにすぎないという。ある本能の**目標**（aim）とは本能の充足であり，本能源泉における刺激状態の解消によってしか到達されない。本能の**対象**（object）とは目標を達する所のもので，外的なものである必要はなく，自分自身の肉体の一部であってもよい。同一の対象が同時にいくつかの本能充足を与えることもある。本能が対象ととくに密接に結びついていれば本能の**固着**（fixation）といわれる。本能の**源泉**（source）とは，ある身体部分における刺激が精神生活には本能として表せるような肉体的過程を意味する。本能にとって身体的源泉に由来している点は絶対的に決定的なことであるが，本能は精神生活においては，結局その目標によってしか分からない。

フロイトはもはやこれ以上分解できないという**原本能**（primal instincts）を二つグループに分けることを提案する。つまり**自我**（ego）ないしは**自己保存**（self-preservative）**本能**のグループと，**性**（sexual）**本能**のグループである。転移神経症と呼ばれる疾患には性の要求と自我の要求の間の**葛藤**が見出されるとした。性本能はまず自己保存本能に依存するが，漸次離れていく。性本能の一部は終生，自我本能とともにあって，自我本能にリビドー的構成要素を賦与する。

本能の運命として，以下のものがある。**対立物への逆転**は，ある本能の能動性が受身性へと転ずることであり，他は内容性の逆転である。たとえば，サディズムとマゾヒズム，覗見症と露出症という組み合わせがある。**内容の逆転**は愛が憎しみ変わることである。**自己自身への向き換え**とは，マゾヒズムが自我自身に向けられたサディズムであり，露出症者が自分自身の身体を覗くことであり，目標は不変で対象が変更されている。「愛する」ことには三つの対立関係があり，愛する―憎む，愛する―愛される，愛すると憎むことをいっしょにしたものが無頓着あるいは無関心である。フロイトは，第2の愛する―愛されるのは，自分自身を愛することであり，これは**自己愛**の特性とみた。

自我は自体愛的であるかぎり，外界を必要としないが，自己保存本能にもとづく経験にしたがって，対象を外界から手に入れるようになる。自我は差し出された対象を快感の源泉となるかぎり自己の自我の中に取り入れ摂取する。このようにして自我は原初的な**現実ー自我**（reality-ego）から，快感を至上とする**快感ー自我**（pleasure-ego）へと変わっていく。

愛と憎しみは単純な関係にあるわけではなく，それぞれが別個の起源をもち，独自の発展をたどって，ついに快，不快の関係の影響のもとに対立物として形成されたものである。愛は本能興奮の一部を器官快感の獲得によって自体愛的に満足させるという自我の能力に由来する。愛は根源的には**自己愛的**であるが，**合体された対象**へと移行し，自我の方から快感源泉となるような対象を求める運動によって表現される。フロイトは，憎しみが愛より古く，外界にたいして自己愛的自我が示す根源的な拒否から発生しているとみる。憎しみは自己保存本能と密接に関連して，対象から喚起された不快反応の表れである。**アンビバレンス**という愛の混じり合った憎悪は，自己保存本能という源泉に還元される。愛情関係が破綻した時，現実的に動機づけられた憎悪は**サディズム的段階**への退行によって強化されて，その結果憎しみは性愛的性格をおび，逆説的に愛情関係の存続が保証されることになる。

３．抑圧（1915b）

自我は本能衝動から逃げ出せないので，逃避と拒否の中間物として**抑圧**（repression）が存在し，抑圧は意識からの拒絶と隔離において成り立つ。フロイトは抑圧がもともと存在する防衛機制ではなく，意識された精神生活と無意識の精神生活とのはっきりした区別ができる以前にはありえないとみる。**原抑圧**（primal repression）という，心理的（表象的）な代表が意識の中に入り込むのを拒否する第一段階の抑圧を仮定する。これと同時に**固着**（fixation）が行われ，これに衝動が結びつく。抑圧の第二段階である**本来の抑圧**（repression proper）は，抑圧された心理的な派生物に関連するか，起源は別だがその代表と結びついてしまう関係にある思考傾向に関連している。

抑圧は一つの心理体系，つまり意識の体系への関係だけしか妨げない。精神分析はたえず患者に抑圧された派生物を出すように要求しており，その派生物は隔離や歪曲によって意識の検閲を通過できる。そもそも神経症症状は**抑圧されたものの派生物**であり，拒絶されていた意識への通路を**症状形成**によって最終的に勝ち取ったものである。抑圧は絶えず力の消費を必要とするものなので，それをやめることは**経済的**には節約を意味し，それは**夢の形成**を可能にする。

精神分析からみると，衝動の代表の量的因子の運命は三種類あり，衝動が全く圧迫されて見えなくなってしまうか，なんらかの色彩を帯びた**感情**として現れるか，または**不安に転化**するかである。抑圧の動機と意図は不快を避けることにあるが，衝動代表の**情緒価**（quota of affect：情動のさまざまな変形物を示す）の運命は，表象の運命よりもずっと重要である。

抑圧は一般に**代理形成**（substitutive formation）を生み出す。ただし代理形成や症状をつくるものは抑圧それ自体ではなく，まったく別な過程から発生する**抑圧されたものの再現**（return of the repressed）の兆候である。フロイトは，①抑圧のメカニズムは代理形成のメカニズムと一致しない，②いろいろな代理形成のメカニズムがある，③そのうちで少なくとも一つは

抑圧のメカニズムに共通であり，それは**エネルギー充当の除去**（withdrawal of the cathexis of energy：備給の撤収）であるという。

不安ヒステリー（動物恐怖）は，動物が父と同じ位置を占め，表象部分の代理形成は置き換えられ，不安に転化したもので，抑圧がまったく失敗したものと考えられる。ヒステリーの抑圧は代理形成の意味では完全な失敗であるが，**情緒価**の処理という点では完全な効果をおさめている。

強迫神経症の抑圧は初期と後期はでは違ってくる。まず抑圧は完全な成果をおさめ，表象内容は拒絶され情緒は消失し，代理形成としての自我の変化，良心の高まりが現れ，代理形成と症状形成は分解する。初めは**反動形成**によって抑圧を許した**アンビバレンス**は，抑圧されたものが再現できる場所であり，社会性の不安，良心の不安，容赦のない不安が再現されている。拒否された表象は**置き換え**によって代理され，強迫神経症の抑圧は何ら効果のない輪を描くことになる。

４．無意識について（1915c）

抑圧過程の本質は，欲動を代表する表象を捨て去ったり，減らしたりする点にあるのではなく，そういう表象を意識しないでおく点にある。その表象は無意識の状態にあるが，ついには意識に達することがある。精神分析はこれまで精神過程の**力動的な**（dynamic）見解によって従来の心理学と区別されていた（力動論）。これに加えてフロイトは，**心理的局在性**（topography）を考慮し，ある精神作用がどういう体系の中で行われるのか，どういう体系のあいだでそれが営まれるのかを明らかにしようとする（局所論）。そのために精神分析は**深層心理学**（depth-psychology）と名付けられた。

意識と無意識の対立は，欲動には適用されない。欲動は表象に付着するか，一つの感情状態として現れるしかなければ，欲動について何も知ることはできないであろう。情緒は決して無意識ではなく，その表象が抑圧されるだけで，もとの情緒興奮を**無意識的な情緒**（unconscious emotions）と呼ぶ。情緒はそのままで存続するか，質的に違った**情緒価**，つまり不安に変形していくいか，鎮圧されていく道をたどる。

フロイトは，抑圧を維持し，その再建と継続をはかる過程として，**反対充当**（anticathexis：不快な表象に結びついていた備給の撤収によって自由になったエネルギーを利用して，無意識の欲望や表象が意識に近づくのを妨げる表象や態度などへ自我が備給すること，逆備給とも訳される）を仮定した。心理現象の説明にあたって，力動論，局所論の外に，ここに**経済論**の観点をもうけるに至り，**メタ心理学**（metapsychology）が完成に近づく。

不安ヒステリーの表象は，一方では拒まれた表象と連想のうえで関連を持ち，他方では拒まれた表象から遠ざかり（置換による代理），制止しきれない不安の発展を合理化したものである。動物不安は無意識の衝動から動力を取り込んでいるので，「意識」体系からの影響を受け付けないほどに制御しがたい。そこで「意識」体系からの**反対充当**は，不安ヒステリーの**代理形成**をもたらす。また，防衛機制の活用によって，欲動による危険が外界に**投影**され，外部の危険にたいして恐怖的な回避で応ずることができる。

転換ヒステリーでは，抑圧された表象の欲動充当は症状の神経支配に置き換えられる。症状に選ばれた部分は，「意識」体系の防衛あるいは処罰の努力を表すと同様に，欲動の願望をも表現する条件を満たしている。つまり症状は**反対充当**に依存するだけではなく，症状のうちに濃縮した「無意識」体系からの**欲動充当**にも基づいている。他方，強迫神経症では，「意識」体系の**反対充当**がもっと前面にでている。それは**反動形成**として組織化されて最初の抑圧をはたし，抑圧された表象の侵入がそれに続くのである。

「無意識」体系に属する事象は，矛盾のないこと，**一次過程**（primary process：充当の移動過程と濃縮過程を有する），時間がないこと，外部の現実を**心理的現実**（psychical reality）にかえる特徴をもつ。無意識の過程は，夢と神経症という条件のもとで知られている。「前意識」体系は**二次的過程**（secondary process）が支配し，表象内容が相互の交流を行うこと，それを時間的に秩序立てること，検閲の実施，現実吟味と現実原則を特徴とする。

「無意識」はいわゆる派生物の中に生き続け，たえず「前意識」に影響与え，逆に「前意識」からも影響を受けている。検閲を「無意識」体系と「前意識」との間にもうけていたが，いまや「前意識」と「意識」にある第二の検閲が問題になる。ここでは意識することが単なる知覚作用でなく，この検閲の存在は**過剰充当**であり，心理的体制の一歩前進であること示している。一人の人間の「無意識」が「意識」を避けながら，他の人間の「無意識」に反応することができるのは注意に値する。「前意識」の内容は，一部分は欲動生活に由来し，他の部分は知覚に由来している。この体系の過程が，どのくらい「無意識」に直接の作用を及ぼすかは疑問であるが，実際例としては「無意識」の独立性を示している。

意識される表象は，**事物表象**（thing-presentation）とそれに属する**言語表象**（word-presentation）とを含み，無意識の表象はたんに事物表象だけである。「前意識」体系は，この事物表象がそれに相応する言語表象と結合して**過剰充当**を受けることで生じる。このような過剰充当は高次の心理的体制をもたらし，一次的過程は「前意識」を支配している**二次過程**によって交代することが可能であることを推測させる。

5．悲哀とメランコリー（1917）

フロイトは，**メランコリー**（melancholia）を正常な**悲哀**（mourning）と比較しながらその本質を明らかにする。ここでは心因性のものを扱っている。悲哀はきまって愛する者を失ったための反応であるか，あるいは祖国，自由，理想のように愛する者の代わりになった抽象物の喪失に対する反応である。病的な素質が疑われる人たちには，悲哀の代わりにメランコリーが現れる。メランコリーの精神症状が，深刻な苦痛にみちた不機嫌，外界に対する興味の放棄，愛する能力の喪失，あらゆる行動の制止と自責や自嘲の形をとる**自我感情の低下**を示す。この自我感情の障害が悲哀と違うところである。

メランコリーも愛する対象の喪失に対する反応であることは明らかであるが，患者自身も何を失ったのかを意識的にはつかめないでいる。患者は誰を失ったかは知っているが，何を失ったかを知らない。この点で，失われたものをよく認識している**悲哀**と区別される。悲哀では外の世界が貧しく空しくなるが，メランコリーでは自我それ自体が貧しくなる。メランコリーの場合，自己非難は愛する対象に向けられた非難が方向を変えて，**自分の自我に反転**したものとみれば，病像が理解できる。対象充当はさほどの抵抗もなく棄てられるが，解放されたリビドーが他の対象に移動せずに自我に戻る。リビドーは勝手に使われるのではなく，棄てた対象と自我とを**同一視**（identification）するために使われる。対象選択は自己愛的基盤のうえで行われるために，対象充当が困難になると自己愛に退行する。対象との**自己愛的同一視**（narcissistic identification）が愛の充当の代用となり，愛の充当が愛する者との葛藤があっても放棄されない。

メランコリー患者の対象に対する愛の充当は，その一部は同一視に退行し，他の一部はアンビバレンスに影響されて**サディズム段階**に戻る。このサディズムによって，**自殺傾向**の謎がとける。自我が**対象充当の逆転**によって自分自身を対象として扱い，対象に向かっていた敵意を自分に向け，外界の対象に対するもとの反応と入れ替わったとき，自我が自らを殺すことになる。他方，**躁病**では自我が対象を克服し，メランコリーが自我から引きだして拘束していた**反対充当**を自由に使えるようになっている。躁病の患者はそれまで悩んでいた対象から解放されたことを誇示する。

対象の喪失，アンビバレンス，リビドーの自我への退行というメランコリーの三前提のうち，初めの二つは強迫的な自責のときも見られる。メランコリーが終わって解放されると躁病を起こすが，リビドーの自己愛的退行が関連しているとみられる。

Ⅲ．晩年の理論的展開

フロイトは1920年に心的機能を支配している快感原則よりさらに根源的であるという反復強迫を検討した結果，「死の本能」を導入して，生の本能との根本的な葛藤を論じるようになった。1923年には超自我を加えて，今日広く知られている自我，エス，超自我という心的構造を論じた（構造論）。

1．快感原則の彼岸（1920）

フロイトは，心が不快を避け，快を生むような結末に向かって進むという**快感原則**（pleasure principle）に支配されているとし，不快は興奮量の増加に，快はこの量の減少に相応するとみた。快感原則が内在する興奮をできるだけ低く，あるいは少なくとも恒常的に保つのは**恒常原則**（principle of constancy）に由来しているとした。フロイトは**災害神経症者の夢**（不安夢）の研究によって，夢本来の願望実現の傾向を疑うべきでないとすれば，夢の機能もまだ他に残されているかもしれないと考える。ここで，ゾフィーの息子である１歳６ヶ月の男児の糸巻きの遊びを，母親が「いない」「いた」とみて，消滅と再現を表すものだとした。つまり，この遊戯は子どもを置き去りにした母親に対する抑圧された復讐衝動の満足であるともいえる。

患者は抑圧されたものを医師が望むように過去を追憶する代わりに，現在の体験として反復するように余儀なくされる。フロイトは，被分析者の抵抗が自我から生じ，それに続いて起きる**反復強迫**は意識されぬ抑圧されたものに由来すると考える。意識的な自我と前意識的自我の抵抗は快感原則に奉仕しているが，反復強迫はたいてい自我に不快をもたらす過去の体験を再現する。転移や人の運命には，快感原則の埒外にある反復強迫が存在すると仮定できるし，災害神経症者の夢と子どもの遊戯本能もこの強迫と関係するとみる。反復強迫と直接的な快い衝動満足とは緊密に結合し，転移の現象が抑圧を固執している自我の抵抗に奉仕しているのは明らかであるという。ここからフロイトは，「**反復強迫が快感原則をしのいで，より根源的，一次的，かつ衝動的である**」と考える。

外傷性とは，**刺激保護**（protective shield against stimuli）を突破するほどの強力な興奮外部から来たものであり，この際快感原則は無力にされる。災害神経症者の夢が患者を規則的に災害の場面につれ戻すとき，それは願望実現の役立ちはしない。フロイトはこれらの夢が不安準備を発展させつつ，刺激の**統制**（mastery）を回復しようするもので，**反復強迫にしたがって**，忘却されたものと抑圧されたものを呼びだそうとする願望に支えられるという。夢は全精神生活が快感原則の支配を認めた後に，はじめてわがものとなしえるとみる。

小児の精神生活の初期の活動や精神分析的治療に現れる反復強迫は，高度に衝動的な，快感原則に対立してデモーニッシュな性格を示している。フロイトは反復すること自体が快感の源になるが，被分析者にとっては，幼児期の出来事を転移の中で反復する強迫が快楽原則の埒外であることは明白であるという。フロイトは「**本能とは生命ある有機体に内在する衝迫であって，以前のある状態を回復しようとするものであろう**」と述べ，あらゆる生物は内的な理由から死んで無機物に還るという仮定が許されるのなら，あらゆる生命の目標は死であるとしかいえないとし，ここに**死の本能**が提唱された。性的本能は本来**生の本能**（Lebenstrieb）であり，死に導く本能の意図を阻むものであり，自我本能または**死の本能**（Todestrieb）と対立する。対象愛にもこれに似て，愛（情愛）と憎（攻撃）との対立がある。**サディズム**は自我からはみ出して対象に向かって現れる死の本能であると仮定される。そうすればサディズムは性的対象を支配するという性的機能にも奉仕するものとなる。

フロイトは快感原則において，内的な刺激緊張を減少させ，一定の度合いに保つか，またはそれを取り除く傾向があり（恒常原則とか涅槃原則という），これが死の衝動を信ずる有力な動機の一つであるという。生の本能は死の本能を妨害者として，絶えず緊張感をもたらしてはその排除を快と感ずるのであって，死の本能が目立たずに作業を行うのと対照的である。この意味で，快感原則はまさに死の本能に奉仕する。しかしフロイトは死の本能を確信しているわけでなく，「ここで展開した仮定を私は自分でも信じていないし，他人にもそれを信じよなどと求めはしない」と述べる。

２．集団心理学と自我の分析（1921）

フロイトは，人間が個人と他人との関係を無視しても差し支えない立場に置かれるのは稀なので，個人心理学は最初から広い意味で社会心理学であるという。社会的な精神作用と自己愛的（あるいは自閉的）な精神作用との対立は，もっぱら個人心理学の領域内ことであるが，社会心理学ないしは集団心理学から切り離すことはできない。フロイトが期待していることは，一つに**社会的本能**（social instinct）は根源的な本能ではないこと，もう一つはその本能が形成される端緒は家族のような狭い集団の中に発見されることである。

集団とは何か。どうして集団は個人の精神生活に決定的な影響を及ぼすのか。集団が個人に強制する心の変化と本質とは何か。ルボンは群衆心理について，集団中の個人の状態を催眠状態そのものと見なしていた。**被暗示性**の源泉をルボンは言及していないが，フロイトは集団精神と原始人のそれとを同一視することの正しさを明らかにできるという。

リビドー（libido）は情動の理論から得た言葉であり，愛として総称されるすべてのこと関係している。愛の関係が集団精神の本質をなしているという前提に立つと，第一に集団は明らかに何らかにこの力で結合されており，エロス以外のどんな力もこの働きを帰することができない。第二に他人の暗示にかかっているのは，その人と和合したいからであるといえる。

高度に組織化された，教会と軍隊という人為的な集団をみていくと，一方で指導者（キリスト，司令官）に，他方では集団の中の個人とリビドー的に結びつけられている。恐慌のさいの不安は，集団のリビドー的な構造の弛緩を前提するものであって，けっしてその逆ではない。フロイトは，個人の不安が危険の大きさによって生ずるか，**感情の結びつき**（リビドーの備給）の喪失によって生ずるかのいずれかだとし，後者が**神経症的不安**である。宗教的集団の解体のさいに現れてくるは不安でなく，それまではキリストの平等愛ために現れなかった敵対的衝動が現出する。原因はむしろ宗教的感情とそれにもとづくリビドー的結びつきの明白な弱化である。二つの人為的な集団は，二様の感情的結合によって支配されており，そのうち**指導者との結合**の方が，集団の中の個人同士の結合よりも決定的であるという。ある時期持続して二人の間に結ばれる親密な感情関係は，拒絶し敵対する感情のしこりを含んでいるが，それが気づかれないのは抑圧されているからである。集団の中では自己愛的な自分に対する愛情が制限され，集団の外では制限されないとすれば，集団形成の本質は集団の成員相互のあらたなリビドー的結合のうちにあることが示唆される。集団における結合の種類は性的目標から外れた衝動であり，**同一視**（identification，同一化ともいう）の機制といわれる。フロイトは「**同一視とは他人の感情結合のもっとも初期の現れ**」とした。男児は父親との同一視と同時に，母親に対する**依存型**の本格的な対象備給を向け始め，二つの心理的に異なった結合を示す。この二つは触れ合い，**エディプス・コンプレックス**が成立する。同一視は最初から**アンビバレンス**があって，情愛の表現にも排除の願望になりうる。**同一視の三つの源泉**について，①同一視は対象に対する**感情的結合の根源的な形式**である，②退行の道をたどって対象を自我に**取り入れる**ことによって，リビドー的対象結合の代用物となる，③同一視が性的衝動の対象でない他人との，あらたに見つけた共通点のあるたびごとに生じるとした。なお，土居（2009）は，同一化の概念が「甘え」と重なるところがあり，同一化によって**対象関係**が生起すると考えたほうがよいだろうと指摘する。

ほれこみ（being in love）とは，直接の性的満足を目標とする対象備給にほかならないが，その満足は目標の達成とともに消滅するもので，**官能的愛**（sensual love）と呼ばれる。幼児が愛する人間に対して抱く感情は目標が阻止され，**情愛的**（affectionate）といわ

れるが，無意識の中には以前の官能的な傾向が多少とも保たれている。ほれこみの現象の中では性的な過大評価が起きるが，判断をあやまらせるものは**理想化**（idealization）である。この場合対象は**自我理想**（ego ideal）の代わりになる。同一視の場合，自我は対象を取り入れることによって自己を豊富にするが，ほれこみでは自我は対象に身を捧げて貧しくなる。

フロイトは集団が原始群族の再生のようなものであるとし，あらゆる個人に原始人が潜在していて，任意に群れをなして集まると，原始団体がそこに再現されるという。集団心理とは最古の人間の心理であるとみる。父祖は息子たちの性的追求を妨げて禁欲を強い，感情的結合を強いることになった。自然の集団形成である家族が永続性をもつのは，父親の等しい愛という前提が家族については現実に適用できるからである。父祖は集団の理想であり，自我理想に代わって自我を支配することになった。

フロイトは，**リビドー理論**から，ほれこみ，催眠，集団結合，神経症について比較評価を加える。**ほれこみ**は直接的な性的追求と目標を禁止された性的努力が同時に存在することによって，対象は自己愛的な自我リビドーの一部を吸収する。ほれこみには自我と対象をいれる余地しかない。**催眠**は目標を禁止された性的努力に基づいており，自我理想の位置に対象をおく。催眠と集団結合という二つの状態は，人間的リビドーの系統発生史に由来する遺伝であり，催眠は素質としての，集団はその直接的な名残としての遺産であるという。**神経症**はほれこみにはない退行の性格を催眠や集団結合と共有するが，直接的性欲動から目標を禁止された性欲動への進歩が完全には成功しない場合にいつも現れる。神経症は，自我に受け入れられた欲動と，抑圧された無意識から発して直接的な満足を求める欲動との**葛藤**に関連している。

３．自我とエス（1923）

フロイトは，ここで述べる考察が『快楽原則の彼岸』に始まった一連の思索に続くもので，この論文の性格は思弁的であるよりは総合的であるという。無意識の概念は抑圧理論から得ており，抑圧されたものは無意識の原型である。無意識には二種類あり，潜在的ではあるが意識されるものと，抑圧されてそれ自身のままでは意識されないものがあり，前者は**前意識**と呼ぶ。**無意識的**という名前は，力学的意味で無意識的な抑圧されたものに限定している。あらゆる抑圧されたものは無意識であるが，無意識的なものはすべてが抑圧されているとはかぎらない。

フロイトは知覚体系に由来する本質（前意識的）を**自我**と呼び，自我がそのなかで存続する他の心理的なもの（無意識的）をグロデック（1923）の『エスの本』にしたがって**エス**と名づけた。自我はエス全体を包んでなく，知覚体系が表面を形成している部位に限局されている。抑圧されたものはエスと合流しているが，抑圧の抵抗によって，自我からはっきりと分かれ，エスをとおして自我と連絡することができる。自我はエスに対する外界の影響とエスの意図を有効に発揮させるように努力し，エスの中で拘束されずに支配している**快感原則**の立場に**現実原則**をおこうと努力する。自我は知覚体系の影響で変化したエスの部分であり，精神における現実外界の代表者である。

フロイトは，エディプス・コンプレックスに支配される性的段階の最も一般的な結果として，自我の中に**沈殿**（precipitate）が起こると仮定する。この沈殿は互いに結合した二つの同一視（父及び母との同一視）が作り上げる。この自我変化は特殊な立場を保ち，**自我理想**（ego ideal）あるいは**超自我**（super-ego）として自我の他の内容に対立する。自我との関係では，「お前は父のようで**あらねばならない**」という勧告だけではなく，「お前は父のようであることは**許されない**」と自我に要求し，自我理想はエディプス・コンプレックスを抑圧する。後に超自我は良心として，おそらく**無意識的罪悪感**として自我を厳格に支配することになる。

自己愛の理論に関して，重要な構想をたてることができる。初めあらゆるリビドーはエスの中に蓄積されたが，自我はまだ形成中であり弱体であった。エスはこのリビドーの一部分をエロス的対象備給に送り，次に強化された自我はこの対象リビドーを占有し，自己をエスに対する愛の対象たらしめようとする。自我の自己愛はこのように対象から撤退した**二次的な自己愛**である。

自我は不安の本来の座であり，三種の危険に脅かされる。すなわち，外界からの脅威，エスのリビドーからの脅威，超自我の厳格さからくる脅威である。不安とは危険から逃れることの表現に他ならない。フロイトは自我と本能との関係について次のように述べる。二種類の本能（性本能あるいはエロスと，サディズムを代表とする死の本能）との間にあって，自我は不偏不党ではいられない。自我はその同一視の作業と昇華作業によって，エスの中の死の本能に荷担してリビドーの征服を助けようとするが，死の本能の対象となり，生命の危険に陥る。それを救うために自我はリビドーで自己を満たさなくてはならないので，自分自身がエロスの代表者となって生きかつ愛されようとする。死の不安は，現実不安，神経症的なリビドーから区別され，自我と超自我の間で，自分自身を放棄することであろうという。

４．制止，症状，不安（1926）

フロイトは，自我機能の単純な低下を**制止**（inhibition），機能の異常な変化や新しい作用が問題

になったときに**症状**（symptom）と呼ぶ。制止は機能と密接な関係をもち，性機能，食事，運動，職業の中で現れる。自我は，エスとの葛藤を起こすのを避けるため，新たな抑圧を企てるはめにならないように，自己のもつ機能を制限する。制止と症状の区別であるが，症状は自我の中の過程や，自我に接した過程としては記述できないという。

フロイトは**症状**が中断された衝動満足の徴候と代償であり，抑圧過程の結果であるという。自我は抑圧によって好ましくない衝動の表象を意識から取り除く。**不安**は抑圧に際して新しく現れるのではなくて，既存の追想像による情緒の状態として再生される**不快信号**であるとみる。治療で扱う多くの抑圧は**後期抑圧**（after-pressure）であるが，それは早期に起こった**原抑圧**（primal-pressure）を前提としている。不安は超自我の分化の行われる以前から起きているとみる。

ヒステリー症状は満足の欲求と処罰の欲求との妥協とみなされる。症状があると，何らかの働きに障害をもたらすが，超自我の督促を緩和させたり，外界の要求を退けたりすることができる。したがって，症状は重要な利益を代表し，自我に欠くことのできないものになる。強迫神経者の症状展開は自分が潔癖で良心的な人間なのだという自己愛的な満足をもたらす。**パラノイア**の妄想形成は，患者の鋭い感覚と空想の活動の分野をあたえ，自己愛的な満足を与える。このように神経症には**二次的疾病利得**が生じる。

ここで『小さなハンス』（1909）の馬恐怖の例を取り上げよう（中野，2013a）。何が抑圧された衝動なのか，何が症状代理なのか，どこに抑圧の動機がみられるのか，これらを見当つけるのはひと仕事である。馬に対する訳のわからぬ不安がその**症状**であり，街を歩けないのが**制止**である。母を愛していたハンスが父親に対する不安を示したとしても恐怖症と呼ぶのは妥当ではない。この反応を神経症にしているのは，父親を馬に**置き換える**（displacement）ことであり，これが**アンビバレンスの葛藤**を解決するメカニズムである。「狼男」（狼恐怖をもつ患者）の場合，抑圧された衝動が父に対する敵意の衝動であり，この衝動は**反対物への転化**（transformed into its opposite）という過程で抑圧された。つまり父に対する攻撃が父親から攻撃されるという形になっていた。

強迫神経症における症状形成は，禁止という犠牲によって代償満足がますます膨大になる。非常な制限を負った自我は，症状のうちに満足を求める。これがだんだん完全な失敗に近寄る過程をたどる。エスと超自我との葛藤が拡大して，仲裁できない自我は，葛藤にまきこまれる。症状には二つの働きがみられ，抑圧の明瞭な代用物となっている。一つは**取消**（undoing）であり，非常に応用範囲が広く，遠く過去にも及び，出来事を「吹き払ってしまう」（blow away）のである。もう一つは，強迫神経症に特有な**分離**（isolating）である。ヒステリーでは心の傷はすっかり忘れるが，強迫神経症では体験を忘れ去ることができず，その情緒を失い，連想的な関係は制圧されたり，中断されて切り離されたりするので，思考活動の経過では再生されない。この分離の効果は健忘を伴う抑圧と同じである。

子どもの動物恐怖に戻ってみると，自我の防衛を引き起こしたのが，母への**情愛的**な衝動なのか，父への**攻撃的**な衝動なのかを決めなければならない。恐怖症ができあがると，情愛的な母との結びつきはほとんど消えてしまい，抑圧によって徹底的に処理されるが，攻撃的な衝動については症状形成が遂行される。フロイトは，われわれはいつも純粋な衝動を扱っているわけでなく，二つの衝動のいろいろの度合いの混合を扱っているのだという。

不快がすべて不安だとはいえない。不安状態の分析は，①特別な不快の性質，②緊張解除の作用，③この作用の知覚，を明らかにする。不安の高まりがあると，これが一方では不快の性質をつくり，他方では緊張解除によって軽減される。不安状態はある体験の再生であって，刺激高進と緊張解除という条件を備える。人間にとっては出産がその典型的体験とみられ，不安状態は**出産時の外傷**（trauma of birth）の再生であるように思われる。不安は**危険**（danger）な状態への反応としておこり，そういう状態に置かれると，きまって再生される。フロイトはランク（1923）の『出生外傷』に関して関心を払うが，出産の視覚的印象を受け入れすぎている，また，子宮内にいた幸福な記憶を使い分けていると批判する。フロイトは不安が対象を見失った反応として現れ，「原不安」が母との別離によって起こることに類似しているとみる。ヒステリーが女性に親和性をもち，愛情の喪失という不安の条件は，恐怖症における去勢恐怖，強迫神経症にける超自我不安と同じ役割を果たすと推測する。

症状形成と不安の発展との関係をみると，症状は自我が危険状況から免れるためにつくられ，**不安は危険に対する反応**である。抑圧は根本的に逃避の試みであり，危険状況が変わると，抑圧されていたものと同じ新たな衝動に対して防衛の理由がなくなり，自我の縮小という結果がはっきりしてくる。抑圧を固定する契機は，無意識のエスの反復強迫であり，このエスは自由に動ける自我の働きによって無効にされている。

フロイトは神経症の発生に関連して次の三つの要因をあげる。①生物的な要因は人間の幼児が長い間持ち続ける無力と依存性のため**愛されたいという欲求**を生み出す。②種族発生的要因は人間の性の発達には中断がある（二相性）という注目すべく事実がある。③心理学的要因としては精神装置が不完全であり，自我は衝動に被害を及ぼした代償として，症状形成を是認する。

さらにフロイトは以下を補足している。

A．以前に述べた見解の修正

(a) 抵抗と反対充当

抑圧が一時的な過程ではなく，持続する消費を必要とする。抑圧をまもろうとする行動は，治療の**抵抗**として感ずるものであり，抵抗は**反対充当**（anticathexis）を前提とする。反対充当は強迫神経症でよくわかり，抑圧された衝動の方向と反対の態度を増大させる。これは自我の**反動形成**と呼ばれる。自我が抑圧を解消させるには，**徹底操作**（working-through）といわれる緊張した努力の時期がある。これは自我の抵抗がなくなった後も，反復強迫の力を克服することに他ならない。反復強迫は抑圧された衝動に対して**無意識の抵抗**として働いている。

抵抗は自我，エス，超自我から生じる。自我抵抗は，**抑圧抵抗**であり，この抑圧抵抗から分離した**転移抵抗**もある。自我抵抗は**疾病利得**から生ずる。**エス抵抗**は徹底操作の時に起き，**超自我抵抗**は罪の意識や処罰の要求に根ざしている。

(b) リビドーの変転からおこる不安

以前の見解は，抑圧された衝動のリビドーを不安の源泉とみたが，新しい考えでは，自我が不安の源泉として，不安とリビドーとの関係は乏しくなった。不安感情の生物学的な意味は，**不安が危険状況に対する一般的反応**とみなされた。不安の場所として自我の役割が確認された。不安の起こり方は，一つには出産に似た危険状況が生じたとき，第二には危険状況が近寄っときに予防的に生じる。

(c) 抑圧と防衛

フロイトは古い**防衛**（defence）という用語を再び使用して，これは衝動の要求に対するすべての過程を包含し，**抑圧**はその特別な場合としてここに含まれる。

B．不安についての追加

不安は**期待**（expectation）と明瞭な関係をもつ。期待は何ものかに対する不安であり，漠然として対象がないという特徴がある。それが対象を見出しときには**恐怖**（fear）ということば置き換えられる。**現実不安**とは分かっている不安であり，**神経症的不安**は分からない不安である。

不安－危険－無力（外傷）という系列の順序に従って，不安反応がその無力の状況という起源から，無力の予期という危険状況へと移行する。現実的不安は外部の対象からせまってくるが，神経症的不安は衝動の要求から起こる。不安と神経症とは密接な関係を示し，自我が不安反応の助けを借りて防衛するが，精神装置が不完全なために神経症に向かう。

C．不安・苦痛・悲哀

不安は**対象喪失**に対する反応であるが，どういうときに**悲哀**（mourning）の反応になるのであろうか。母親を見失うという外傷的状況は出産という外傷的状況と決定点な点で食い違っている。出産の場合は見失う対象がなく，不安だけが唯一の反応である。母という対象がつくられると，「**思慕**」（longing）と呼ばれるものが強い充当を受ける。苦痛は対象喪失に対する元来の反応であり，不安はこの喪失に関連する危険に対する反応である。身体の苦痛では身体の痛む部分に高度の自己愛的充当があって，自我を空にしてしまう作用をする。**悲哀**が生ずるのは，現実検討の影響からで，対象が高度に充当を受けたすべての状況において，この対象から身を引くという仕事を行われなければならないときである。この別離のもつ苦痛な性質は，対象との結びつきがなくなった状況が再生されると，対象に対する強い思慕が充当を示すためだと説明される。

Ⅳ．おわりに

フロイトは60歳を前にして，それまでの仕事を総決算するように，次々とメタ心理学に関する理論的論文を書き上げた。メタ心理学は次第に精緻になり，自我について力動論，局所論，経済論，構造論の観点から定義されるようになり，これが現在広く知られ，**自我心理学**として引き継がれている。

また，フロイトは徹底的に人間の心の葛藤の起源を追究した人である。葛藤を探求するために，彼の本能論は常に**二元論**である。本能の一つとして，ヒステリー研究以来，**性の本能**を重視した。この性本能のエネルギーは**リビドー**と呼ばれ，精神分析では絶対に欠かすことができない概念である（中野，2013a）。この本能と対立するものが，自我本能とか自己保存本能といわれたが，1920年に「死の本能」に修正されたのは何故であろうか。催眠を放棄した精神分析は，抵抗という現象に難しい課題に直面することになった。実際の臨床では，抑圧されたものの想起は難しく，治療が長期にわたるのが希ではない。良くなったと思えるときに悪化したり，外傷的体験を苦痛とともに再現したりする患者もいて，これを**陰性治療反応**と呼ぶ（中野，2014）。そこで，フロイトは想起よりも行動的に反復するという**反復強迫**に着目し，これは快不快原理からなる快感原則をしのいで，より根源的，一次的，かつ衝動的であるとした。

ここからフロイトは本能の本質を以前のある状態を回復しょうとする衝迫であるとみて，死んで無機物に還ろうとするものを**死の本能**と称し，性本能を**生の本能**とかエロスと呼んだ。しかし死の本能の概念が多くの精神分析家の間でも受け入れられなかった。生の本能と死の本能は心理学独自の比喩的言語であるが，キノドス（Quinodoz，2004）は，現実の生と死の間の葛藤と混同されたり，フロイトが思弁的理論だけ述べて，臨床的応用について語らなかったりしたためであろうと指摘する。ただしフロイトは，愛と憎しみの**ア**

ンビバレンスについては至る所で述べている。

死の本能の概念を受け入れて，それを臨床に適用した最初の精神分析家がメラニー・クラインである（中野，2011a）。彼女は，自我が誕生時から存在し，死の本能からの防衛のためにそれを投影したり，攻撃性に変形する乳児の世界を**対象関係論**の視点で論じた。また，土居は生の本能がその中に性本能と**対象を求める欲求**を包含しているとし，自我に発するものを**依存欲求**と呼んだ（中野，2013b）。本能論はそれだけで論じるには限界があり，対象との関係で論じる**対象関係論**に道を譲ることになった。

文　献

1）土居健郎（2009）：臨床精神医学の方法　岩崎学術出版

2）Freud S（1909）：*Analysis of a Phobia in a Five-year-old Boy*. Standard Edition, Vol.10. trans. Strachey J, London: Hogarth Press, pp3-149, 1955. 懸田克躬・高橋義孝他訳（1969）：ある五歳男児の恐怖症分析　フロイト著作集５　人文書院　pp173-275.

3）Freud S（1914a）：*Remembering, Repeating and Work-Through*. Standard Edition, Vol.12. trans. Strachey J ,London: Hogarth Press, pp145 156, 1958. 井村恒郎・小此木啓吾訳（1970）：想起，反復，徹底操作　フロイト著作集６　人文書院　pp49-58.

4）Freud S（1914b）：*On Narcissism: An Introduction*. Standard Edition, Vol.14. trans. Strachey J, London:Hogarth Press, pp67-102, 1957. 懸田克躬・高橋義孝他訳（1969）：ナルシシズム入門　フロイト著作集５　人文書院　pp109-132.

5）Freud S（1915a）：*Instincts and their Vicissitudes*. Standard Edition Vol.14. trans. StracheyJ, London :Hogarth Press,pp111-140, 1957. 井村恒郎・小此木啓吾訳（1970）：本能とその運命　フロイト著作集６　人文書院　pp59-77.

6）Freud S（1915b）：*Repression*. Standard Edition Vol.14. trans. StracheyJ, London :Hogarth Press, pp141-158, 1957. 井村恒郎・小此木啓吾訳（1970）：抑圧　フロイト著作集６　人文書院　pp78-86.

7）Freud S（1915c）：*The Unconscious*. Standard Edition Vol.14. trans. StracheyJ, London :Hogarth Press, pp159-215, 1957. 井村恒郎・小此木啓吾訳（1970）：無意識について　フロイト著作集６　人文書院　pp87-112.

8）Freud S（1917）：*Mourning and Melancholia*. Standard Edition Vol.14. trans. Strachey J, London :Hogarth Press, pp237-260, 1957. 井村恒郎・小此木啓吾訳（1970）：悲哀とメランコリー　フロイト著作集６　人文書院　pp137-149.

9）Freud S（1920）：*Beyond the Pleasure Principle*. Standard Edition Vol.18. trans. StracheyJ, London :Hogarth Press, pp1-64, 1955. 井村恒郎・小此木啓吾訳（1970）：快感原則の彼岸　フロイト著作集６　人文書院　pp150-194.

10）Freud S（1921）：*Group Psychology and the Analysis of the Ego*. Standard Edition Vol.18. trans. StracheyJ, London :Hogarth Press, pp65-143, 1955. 井村恒郎・小此木啓吾訳（1970）：集団心理学と自我分析　フロイト著作集６　人文書院　pp195-253.

11）Freud S（1923）：*The Ego and the Id*. Standard Edition Vol.19. trans. StracheyJ, London :Hogarth Press, pp1-66, 1955. 井村恒郎・小此木啓吾訳（1970）：自我とエス　フロイト著作集６　人文書院　pp263-299.

12）Freud S（1926）：*Inhibitions Symptoms and Anxiety*. Standard Edition Vol.19. trans. StracheyJ, London: Hogarth Press, pp77-175, 1959. 井村恒郎・小此木啓吾訳（1970）：制止，症状，不安　フロイト著作集６　人文書院　pp320-376.

13）Gay P（1988）：*Freud: A Life for Our Time*. New York: W.W.Norton. 鈴木晶訳（1997，2004）：フロイト１，２　みすず書房

14）Groddeck G（1923）：*Das Buch Vom Es*. Wien: Internationale Psychoanalytische Verlag. 岸田秀他訳（1991）：エスの本　誠信書房

15）中野明徳（2011a）：メラニー・クラインの対象関係論―抑うつ的態勢と妄想・分裂的態勢．福島大学心理臨床研究，6，1-10.

16）中野明徳（2011b）：S.フロイトのヒステリー論―心的外傷の発見．福島大学総合教育研究センター紀要，10，15-24.

17）中野明徳（2012）：S.フロイトの夢判断―自己分析が生み出したもの．福島大学総合教育研究センター紀要，12，1-10.

18）中野明徳（2013a）：S.フロイトの性欲論―幼児性欲と転移の発見．福島大学総合教育研究センター紀要，14，23-32.

19）中野明徳（2013b）：土居健郎の「甘え」理論－日本語による対象関係論の創出．福島大学心理臨床研究，８，1-10.

20）中野明徳（2014）：S.フロイトの精神分析技法論―暗示療法を超えて．福島大学総合教育研究センター紀要，16，9-18.

21）Quinodoz JM（2004）：*Lire Freud*. Presses Universitaires de France. 福本修監訳（2013）：フロイトを読む　岩崎学術出版

22）Rank O（1924）：*Das Trauma der Geburt*. Wien：Internationale Psychoanalytische Verlag　細澤仁他訳（2013）：出生外傷　みすず書房

23）Schur M（1972）：*Freud : Living and Dying*. New York: International Universities Press. 安田一郎・岸田秀訳（1978-79）：フロイト　生と死（上，下）　精神書房